S·U·A·C

月報 51

特集／春山合宿報告

1966. 4. 26

信州大学山岳会上田(繊維)山岳部

I. 月報"SUAC"の発刊

1.1. 発刊にあたり

主将 佐々木史郎

全国無数に存在する山岳会。その多くが彼等自身の手で彼等独自の山行記録 喜びや悲しみ、悩み等々、あらゆるもの一切を1つの会報なり月報の中に再現し、全会員にそれらを理解してもらう。又、それに対して、各人各様の立場に立った意見を述べてもらい、それを会の運営に役立てゆく。そこに会が"成長してゆく"原因があるのではなかろうか。私は以前からそれを考えていた。

今や2令の休眠から、3令への脱皮の時期に我部はさしかかっている。我々は古い皮をぬぎすて、新しい感覚で物事をとらえてゆかなければならない。大きな視野の上にたつ考え方が現在の山岳界には必要条件なのである。我々が人手不足にもかかわらず"上小労山"への協力を申し出たのも、そこからきている。

更に又、スリップ事故とか"ネンザ"等がどうして起るのか、各山岳部のみの問題にとどめておかず、当然これはSAC全体で考えてゆくべき問題である。我々には、我々のムードが……、技術的指導にくいちがいがあるとかの理由で、今だに、SAC合同の山行はもっていない。そのような理由に、私は共協できないばかりか、「まだ15世紀の山岳会か…?」と失望さえ感ずる。

"月報発刊"たる仕事がいかに困難なものであるかは新たに説明するまでもない。しかし、今の我部は、以上、述べたような気運に、新風を送りこまんとする熱意に燃えている。私はこれに、答える意味でかねてから計画していた"月報発刊"を思い立った。これが、たとえ貧弱なものであっても、その意義は大きく、かつ、貴重なものであることを理解して欲しい。

私はこの幼い芽も、やがては大きな幹となり、葉を豊かにし、必ず実熟した実をもたらすであろうことを信じて疑わない。

1.2. その形態

1.2.1 この月報(1966年4月号)は、第51号として発刊し、以後、52.53…と続けてゆく。(第51号としたのは、過去、発表された記録がほゞ50部位になるだろう…云々。という訳である。)

1.2.2 係2名をおき、月報発刊業務完了までの責任を負う。しかし、全員の協力は云うまでもないことだ。

月報係 {河原洋(機2)
市野勝正(機3)

1.2.3 その内容は合宿の計画、報告をはじめ、部内、部外(関連事項)に起るあらゆる事件の集録の言とし、O.B会との連絡の密度化を計り、我が部の栄枯盛衰、喜怒哀楽の厂史をきざまんとするものである。

1.2.4 その経費について

現在のところ、森田(O.B)氏からの資金カンパで発刊準備を進めているが、森田氏も色々と個人負担の大きな仕事をしている折から、我々も、ここで再考を要する。この経費の援助はむしろO.B、O.Gの皆様方全員に協力願いたい。又、それが、最もよい方法であると思う。

(注、アンケート用紙参照)

II 春山合宿報告

1 計画から準備まで　　CL. 岡村紀雄

我々が春山の舞台として考えていたのは、剣であったが、南ノ縦に変更後最終的に戸隠と決定した。戸隠に決定した理由は、部員の入山できる日がマチマチであって、全日入山できる者が2名のみであるので、B.Cまでのアプローチが短かいことが必要であるので、剣、南ノ共にオミットせざるを得なかった。この点戸隠は最適であって、ルート自体としても、未登の本院ダイレクト尾根は、我々の力をためすには絶好の場所であると考えた。合宿自体の形としては、前半新人を主体とした高妻山まで縦走、後半本院ダイレクト尾根であった。

2 計画概要

2.1 期間　1966年3月22日 ～ 4月2日　(12日間)

2.2 場所　戸隠山塊西斜面及び高妻山周辺

2.3 形式　前半(22日～26日)…縦走　後半(27日～2日)…定着

2.4 目的

2.4.1 リーダーシップ、メンバーシップの確立強化

2.4.2 積雪期登山技術一般の習得

2.4.3 戸隠西斜面の実践開拓(記録的価値)

2.4.4 5月合宿にそなえての練成

3 行動概要

3.1 参加人員構成と入山日数

(氏名)	身分	(役割)	入山日数
岡村紀雄	(化工3)	C.L. 記録	3/22 ～ 4/2
佐々木史郎	(農2)	SL. 気象(準備全般)	3/27 ～ 4/2
東良明	(法1)	装備全般	3/22～3/26 3/29～4/2
河原洋	(機1)	食糧	3/22 ～4/2.
杉本敏宏	(化工1)	会計食糧	3/22～3/26 3/28～4/2
森田稲吉郎	(教育監督OB)	アドヴァイザー Support 隊 leader	3/27 ～ 4/2.

3.2 白馬山行　　（村瀬、杉本、河原）

3月22日　　雪

長野発(9:00) バス 宝光社着(10:05)・同発(10:50)——

—中社(11:30)——牧場(14.20)

中社より雪となりラッセルが"ひざ"までありかなりつかれた。牧場にテント設置(14:50)する。夕方よりミゾレとなる。

23日 ---- くもり

牧場発(7:40)----一不動着(13.50)

雪がすこし降っていたが出発する。"ひざ上100cm"の重いラッセルで全員しごかれる。大同沢の上部の尾は横がかなり急な雪面にとる。

24日 ---- 快晴

一不動発(7:15)—五地蔵(8:00)—高妻山着(9:45)同発(10:20)—五地蔵(12:00)——一不動(12:40).

天気は快晴でアタックには最適なり快調にとばす高妻山の登はかなり急なり下りはアンザイレン。やはり春山である晴ればかなり"あつい"木の影に入るとすずしく気持がよかった。

25日 ‥ 雪　風強し

沈殿　　沈殿もまた楽し.

26日　　晴

一不動(9:00)—牧場着(11:30)同発(12:05)—中社着(1:45)

—宝光社着(2:15)

岡村氏の目貫時計が働かずク時まで寝てしまう。下降は昨日の新雪のため全員"ツル ツル"ゴリセード"入山の際あれほど苦労したとこうを2時間で下山。奥社入口にて表山、西岳のながめを楽しむ。宝光社に岡村氏、河原を"のこして"患、杉本は下界へと下る。

第1回S.A.C.委員会報告

1、新役員の選出

○S.A.C.委員

(長野) 望月、宇都宮、聖条、西山、(上田) 佐々木、東

(松本) 新谷、中村、井上、福原、(の牧)

委員長：宇都宮　副委員長：井上

会　計：佐々木　書　記：聖上

○遭対委員

(長野) 秋元、向後、(上田) 佐々木、杉本

(松本) 中村〔委員長〕、牧

○Summer tent 委員

(長野) 藤本、加藤、(上田) 河原、(松本) 井上

扇野、〔委員長 井上〕

2、新人対策概要

☆S.A.C.の新人係　(上田) 東、(松本) 井上、

(長野) 向後

☆トレーニング係：井上 (長の、上田共に松本に一任)

☆"松本部会"……"金"午後8時より、松本部室にて

これが1年生との唯一の集いとなる。連絡事項あれば

上田からも出かけて行く。

☆岩トレ……上田訓練しない場合は松本に頼む

☆新人合宿……合流訓練を行う。

☆遭対基金……上田で1万円。(O.B.会の援助)

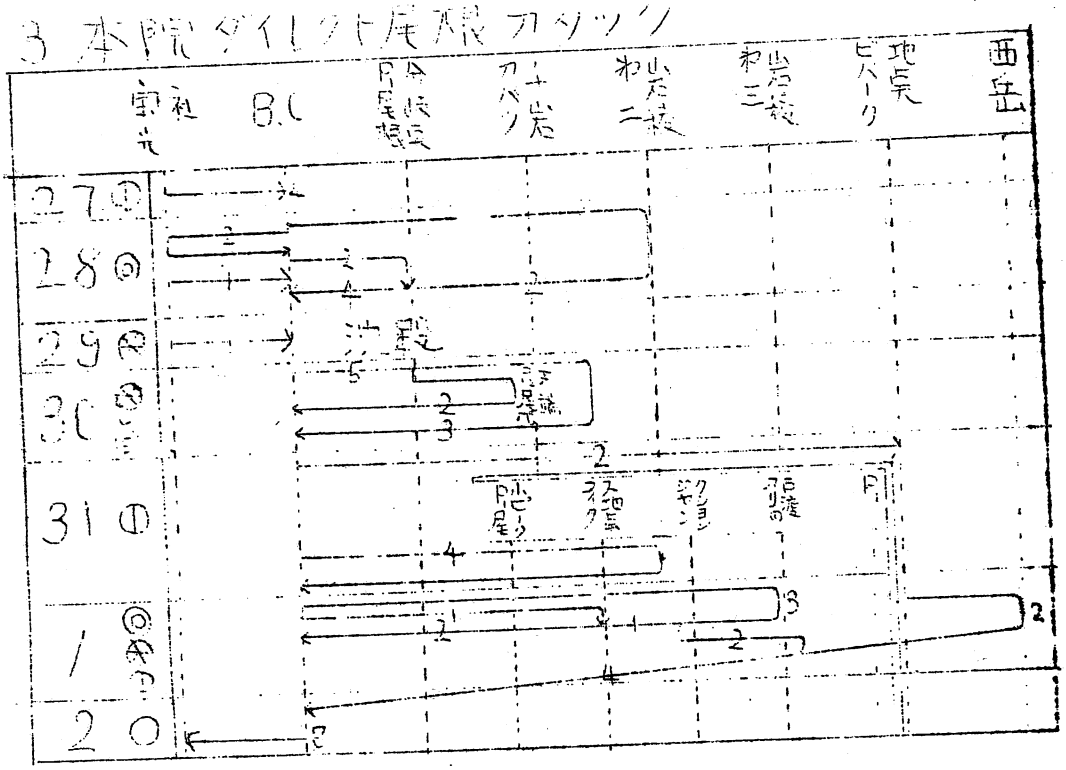
☆遭対の方でO.B.の名簿を、S.A.C.の方で現役の名簿を作る

☆女子部をS.A.C.の中におき、しばらくは長野で指導

☆教養部山岳部を設置(名目だけ)、それはS.A.C.の下に

指導されるものとする。

3.3 本院ダイレクト尾根アタック



概念図は計画書参照、

3月27日　晴れ
佐々木、森田両氏入山、岡村氏河原と感激の対面する宝光社より天狗原にB.C設営する。
宝光社発(10:20)—柳川出合(14:00)—B.C設営(17:00)
3月28日　曇り　ダイレクト隊　B.C発(7:30)—和二岩稜(13:00)偵察(15:00)—B.C着(17:20)
ホッカ隊—森田、河原、杉本　17:00B.Cに入る。行動はやや軽率、偵察は充分安全行動する。アタック隊　岡村　佐々木
3月29日　沈殿　風雪強し　すかりの樹氷みごとなり、積雪30〜70cm裏B.Cに入る。
3月30日　雪のち曇り
ダイレクトラッセル隊　佐々木　河原　裏、B.C発(12:00)—分岐点(12:40)—アバノ谷(3:00)
P1〜P6偵察隊　森田、杉本、岡村　沈殿
ジャンダルム取付点手前300mのラッセル奉行せり、積雪は90cm余り
3月31日　晴
サポート隊　森田—河原—~~河原~~—杉本—裏
B.C発(7:15)—P1分ギ点(8:00)—P1上部着
アタック隊と交信しながら、深い所でもモモまでのラッセルに苦しみながら進む、ナイフリッジあり、せまいトラバスあり、木登りありで変化に富みかなりの難所であった。ルンゼの下に1:30分ほど登ロもさがす、結局ルンゼの右側リリそこにフィクスもし、さらにルンゼの右も木登りしながら50m位などのぼり B.Cにもどる

Attack隊：岡村・佐々木

前夜の総括反省会で、我々がAttack隊に、Support：森田、河原、杉本、Tent-Keeper：裏と決定。午前3:00発の計画を立てた。徹夜で天気予報を聞き、又、天気図をとってくれた裏をはじめ1年生全員1時起床。我々の起床する2:00までには、すでにメシの用意が整っていた。皆の暖かい援護の意気が何よりも我々に安心感を抱かせ、いつしか、期待に答えようとする気持に変えさせていたのだった。出発、3:15。辺りは未だ暗い。空には星が輝き今日は絶好のattack日和だ。前日のラッセルのあとがやみの中にえんえんと連なり、やがて消えていた。アイゼンも何と心地よくきくことであろう。我が心は、早くもattack成功を夢み、胸の高まりを覚えるばかりだ。体調もベスト。雪面より70cm程低いほ装道路を快調にとばし、いよいよ、ラッセル工作の終了地点に来た。前日の大雪は、梢をしつように圧迫し、あわれ、先端は雪中にあり。ピッケルでその木枝をつつく。ドサッ！バカリンコ。あっ、ラッセルがしずらい。あるときは胸までつかり、又あるときはサルの木登りをした。ようやく5:45。予定地点に着き、先ずはギジをうつ。後来党だ！アア、マブシイ！てらし出されたP1の何と美しかったことか！我々はあの感激を忘れない。6:00、トランシーバーの感度良好。交信の声も明るい。6:30、いよいよ本番である。最初からラッセルは胸までつかる。2月日、恐る恐る退却した地点が今日はさほど気にならぬ。雪が割合しまっており、安心する。第2岩稜のアップダイレンは約12,3m。絶壁である。雪と風に加工されたダイルでの下降にやっ不安を覚える。降りると又第3岩稜のラッセルだ。第3岩稜の窓に出るところがヤバイ。本日のヤマ場はこの4～5mの登りにあるのだ。岩稜の裾を巻くトラバース。下はスパッと切れ落ちている。確保点がないので気安めにボルト1本を打ちこむ。かつて、G.O.M.の丸山氏が遭難した。その地点も、恐らくここであろう。ここを乗りきるため、ティックス約10mを残す。……ヤッタゾ！この瞬間、我々はダイレクトのattack成功はほぼ間違いないと思ったのであった。赤旗をなびかせると下にモレーヌの赤布がたれている。未だこの地点通過は、我々を含めて4,5名しか居ないことだろう。全身ズブヌレで稜線に出たのは14:00。第1段階を突破した満足感よりもむしろ恐怖心だけが残った。いよいよ雲行があやしい。相当体力を消耗している。偵察状況では、本院のピークまであと、わずか100mもあろうか。だが雪庇と岩

↑ 攀はどうみても不可能だ。ついに、時間は早いがsupport隊の了承を待ってビヴァークと決定する。（ビヴァーク）これは計画的なビヴァークであった。10日程前にやった王レーヌのビヴァーク跡がハッキリ残っている。風も全く吹きつけない。何と快適だろう。しかし喜ぶのは早すぎた。メタの熱で雪洞がとけはじめたからたまらない。乾かそうとした衣類が、逆に湿気をおびる。疲労のためか、食欲も全くない。出まかせに歌をうたい、エロ話をし、不快感、孤独感から、何度も脱しようと試みたのだが……。夜は未だこれからが長い。話の矛もつき、我々は沈黙のまま夜明けを待つのだ。

4月1日、小雪　のち　風速強まる。

Attack隊：岡村、佐々木

寒さに手足がしびれる。時のたつのが、何故、遅いのだ！　B.Cの裏を呼んでは苛痛をぶちまける。徹夜で応ずる裏は災難だ。だが、我々にとって、これがせめてもの慰みなのだ。待ち遠しかった夜明けと共に、全身ガタガタ、ふるえ上る。外では小雪が降り続いている。B.Cとの交信では、午後から、多少、快方に向う見込だ。心配せず、ゆっくり出発せよとのこと。

8:15発。本院のピークまで、西側の大雪渓をトラバースし、60度以上もあろう木登りは苦しい。"木登り"と称するのは、木の枝や根にしがみついて腕力によって登るという意味である。雪の下は岩稜である。従って、木がなければ、そして雪がなければ到底登り得なかったであろう。今、我々の選んでいるルートは本当に正しいのであろうか。絶えず、そんな不安がつきまとう。急斜面に立てば、雪面は頭上にくる。かろうじて、本院のピーク直下にまわりこんだ時はすでに12:00であった。はじめ2時間もあれば……と判断した我々は、まことに軽率であった訳である。前夜の雨に湿気をおびた雪の上部はナダレのベストコンディションであり、ラッセルが気の遠くなるほど苦しい。しかも、完全なルート・ファインディングであることを考えておかねばならなかった。さてキレットの東側を慎重にトラバース。落ちたら、トップは半死気絶、間違いなしである。早く西岳へと気があせる。疲れていても、2分と休むことが許されない。今、考えてみると、私の最も恐く、最も技術を要した登りは、このキレットから西岳までの登りであったと思う。50度から60度近く感ずる急傾斜。余りの急稜に、ナダレによったのか、木さえない。たよりは、ピッケルのみ。正直に云って、

この時ばかりは、決死の覚悟であった。スリップしそこない、もうダメかと思うこと2回。たった30mの登りに40分近くも費したであろうか。ようやく、西岳主峰に出たと思い、17:00の交信をする。だが山は偉大だ。主峰は未だ2つ先のピークにありとの森氏の声に、ガックリと相成る。ガスっていて先が見えない。稜線の風は予期していたものとはまるでちがう。いや、実際、体で感じなければ判らないのだ。先程までズブヌレの衣類が、今度はバリバリに凍り、歩きまるでロボットのごとくぎこちない。ヘマをすると股ズレを起してはれあがる。強風のため一度に疲労がやってきた。もう、すでに体力の限界はこえている。大木の影にうずくまり18:00の交信を待つ。未だ西岳は先にある。「もう、ダメだ！是非、迎えにきてくれ！」「いや、そこでビヴァーク地を探せ！」「何、云ってるんだ！俺たち、疲労凍死寸前なんだぞ！バカヤロウ！」「弱ったなあー、ウーン……弱った。」「今、どこにいるんだ！ここまで来られんのか！」「P1直下300m地点にいるんだが、眼前の登りがヤバクて一寸生きでは、とても不可能だ……」……殺気だった交信、およそ20分。

我々も最後の力をふりしぼって再出発することにした。腹がへりすぎて、何も口に入らない。あの時、2袋ずつあった粉末ジュースの味は生涯忘れぬものとなろう。

時間縮少のためコンテニュアスは中止。ザイルは思いきってザックへ。気安めに、ピッケルで確保したところで、トップが落ちたら2人ともダメだ。無事に戻りたい気持に変わりがないのだから、ジャマのザイルなど、ない方がよかんべえといった訳である。P1下降地点についた頃には、すでに、一面、闇に包まれていた。トランシーバーを開放って、コールし合い、下降口、確認に、30分以上もかかっていた。ザイルいっぱいの地点にシラカバを見つけ、次の下降者を待つ。「大丈夫だから飛びおりてみい。どっかで、絶対止まる。」といったのを、まともに受け入れたのか、降りて来ると思った次の瞬間、黒いものがサーッと雪面を流れ10m位で停止したかに見えた。"黒い流れ星"かと思った。あとで聞いたら、「さしこんだピッケルのまわりの雪がいけないのだ」と云った。俺が停止するといった言葉の立証である。300mの下降に2時間を費し、約3時間ぶりに仲間に会えた喜び。同時に、寒い中をジッとこらえて待機していてくれたsupport隊。Tent Keeperの奥への感謝の気持で胸がいっぱいになった。夜空には再び星が。我々のAttackは星に送られ又星の出迎えを受けたのであった。Attack成功の喜びもさることながら、今だに、あの恐怖心は消え去らない。

（佐々木記）

1日 サポート隊 [illegible]

[illegible]

さし、ルンゼをつめるが、十り雪崩のため、右手の岩稜をのぼる、岩稜上部から数十メートル急斜面を登るとジャンクションである。ここでツエルトをかぶり、交信するが応答がないので、雪崩に合ったのではないかと心配する。ここから三ヶ所続けてヤセた尾根がある。一つめをわたりカタツク隊と連絡をとろうとするがとれない、一時間半程度すぎた頃、本院と西岳の間のpeakを下る姿をみつけ交信する。peakの名前をまちがえているようだ、河原を下ろして非常にそなえる、6:40再び交信、すぐそこにいる3時間程かけて収容、全員氷だらけ、すぐに下山、サポート隊20時間、カタツク隊46時の行動であった。

2日 下山 快晴

全員が起床したのは11時頃であった。暖かい春の光を全身に浴びて外にてめしをたらふく食う。それからゆっくりと宝光社に下山、終バスに遅れ、雑貨屋のライトバンにて善光寺裏まで運んでもらい、しめて1600円ばられる。

6. 春山総括　　S.L. 佐々木実郎

顧りみるに、この春山は、又、様々な示唆を我々に与えてくれた。これを転機として、部活動をより楽しいものに努力を怠ってはならない。次にこれから改めてゆかねばならない点の、その幾つかを拾い上げてみると、第一に計画の立案・検討段階においては航上学習で充分な研究を積んでおかねばならない。登山行為の安全性を論ずるはかたく、その決定的規準というものはないであろう。故に充分な偵察、研究がものをいく、重要な割合を占めてくるのである。

結の基盤も一応整ってきたかにみえる。だがこれをどう維持し、この技術、体験を、いかに後進に伝えてゆくべきかが、今後の大きな課題となってくる。皆の熟考を要す。

第3に合宿中に他人に迷惑をかける部員の存在についてである。ヘッドを忘れる、ピンチをいい、米を…といった、たぐいである。こういう安易なものの考え方は、まことに危険である。又、そういう者に限って動きが悪い。責任感の修練のために、係、任命にもリーダーは細心の注意を払わねばならない。

第4に、attack食への配慮が浅かったことである。ビヴァーク中、我々は疲労のため全く食欲を失った。がために、翌日の行動に大きく影響を及ぼした事はすでに周知のところである。この問題はきわめて重要なることを痛感した。食糧係と共に、我々の再考を要するところである。我々は民主的な運営を計り、安くて安全で楽しいスポーツアルピニズムの建設を目指して、1歩1歩前進してゆこう!

山岳部数え唄

二つとせ踏んだり蹴ったりどなられて泣き
泣き走った槍ノ穂高
そりゃ無さけですね〜

五つとせいつもひげ面らぶらさげて学校さぼって
山登り そりゃあ落すわけ〜

七つとせひちゃ通は常のこと
命あずけて正登り
そりゃ死なないね〜

十とせとうと出ました
八月一日 世に出て
やくだつ山男
そりゃけんとかね
そりゃけんとだよ

4. 係反省

4.1 装備係・燃料係　東良明

今合宿において装備の欠点がわかり目につかなかった。しかし一歩誤れば大変な大失敗を演じたのではなかろうか。その1つとして、アタックに際して燃料として、メタ缶1ケ、ブタンガス1本を持参してもらったがブタンガスの故障があり燃料としてメタのみとなってしまった。アタック隊はかなりこまった様である。計画ではメタ缶1ケ小1ケを持ってさらにブタンを持ってもらうつもりであったが天狗原ひくに入る際に係が不在であったので件のなどがどこかに紛れてしまったのであるが、その場にいる者のちょっとした注意がなかったのは自分としても大いに反省している。大事にならずまかった。

その2として、フィクスロープの不足である。実際今合宿では30m(麻)を使っただけであるが計画通りに行き、サポート隊が8の頭まで行った場合、下降が際にこまったのではないか。10m以上のフィクスロープがどうしても必要であったのではないか。又我が部にガソリンバーナーが欲しいと思った。B.B諸氏お金を出してください。燃料は十分であった。

又長い間の懸案であったロープが大変役立ったので以後これを使う。最後に装備係としては金さえ有れば何でも難しくない事ではない(ヒマラヤ遠征は別)いかに金をつかわないで良いものをそろえるかが腕の見せどころであるということを痛感した。

4.2. 食糧係反省　　河原洋

交通費が近くて安いことと、諸物価の値上りを考えて1人1日1かくてない豪華版としてみた。

朝食：いつものあのまずい「都一」をやめ一番安いタンメンにしてみた量は少ないが前者同じ。

昼食：行動食について7メ類はドロップや果実が味のするものがのどを潤おす感じがしてよい。洗顔食をパンとマーガリンにしてみたがなかなかな評。カステラの切屑は安くてうまくて大変よかった。リンゴもよかった。それから乾パンをまっにする。

晩食：サラダは軽くて作るのにてすがかからずよい。米は必ず規定量持ってくること。7タツ2食は粉末ジュースのみが唯一の好評食品でした。

それから朝の水浴など結局人のいい奴が毎度行くことになってしまうので、以後この様ないやな事は厳格に等分する。以上　それにしても思い出すのは宝光社で岡村氏と二人で食べたすき焼のうまかったこと。

4.3. 会計報告

収入の部		支出の部	
食料費	12,600	食料費	11,267
装備費	3,250	装備費	3,315
偵察分担金	1,200	偵察費	680
紙代	500	車代	1,600
車代	1,500	郵送料	90
森田氏カンパ	500	層紙代	150
		部費へ繰入れ	2,448
計	19,550	計	19,550

5. 反省会報告

春山反省会は月報発刊、新人対策、5月合宿、その他、労山への協力、C.B会へのカンケート等の諸問題、検討をかねて去る4月15日寮30号室にて開かれた。その概要をここに示す。

5.1. 準備段階

○上級部員のアドヴァイスが欠けたこと、非協力的な面が見られたこと。

○計画立案において、やゝ冷静な判断を怠った。もっと理論的な上学習が必要ではあるまいか。

5.2. 各係について

◎食糧係

○献立とその内容は全般的に合格といえる。即ち、食事を楽しませてくれた、その配慮は素晴らしい。改善策としては計画書に食当の名前を刷りこむ。

◎装備係

○attachの際ブタンの取付けに失敗したが、その操作技術も各人研究しておくことが必要であった。

○改善策としてはワッパは個人装備とした方がよい。又係は管理整頓を徹底すること。

◎会計

○食糧係との兼務は都合がよいといえる。

○改善策としては、金の徴収を強制的に行い、全部員もそれに協力すること。

5.3. 偵察

◎18日の偵察について

○天候にもよるが、オハズカシイものだった。

◎合宿中の(特に28日)偵察試登について

○偵察そのものについては、充分であったが、軽率な判断と

行動しが見受けられ今後、行動には慎重な態度で望まなければならない。

5.4. 下山ルート P1尾根について

○ダイレクト等の西岳東面尾根のattackしては、ここを利用する以外、他に適当なルートが見あたらない。P1利用はやむを得ない。

○ルートについて研究不足であった。

5.5. B、Cの位置

○水場が近くにあり視界も良好、むだな労力を最少限にくいとめる絶好の場所であった。

5.7. Support隊

○戸隠の場合に限らずattack隊と同等、もしくはそれ以上の技術能力を有すメンバーで構成しなければ、その任務遂行はむずかしい。

○Support隊がその目的地点に到達するのを確認してからattack隊が行動を開始することが理想的である

5.8. Attack隊

○技術、体力共に、まことに恵まれた組み合せであった

○ルートの研究不足にもかかわらずルートファインディングが正確であったことは、これからの部活動に少なからずプラスになる

5.9. attack食や燃料について

○水気のあるもの。一切手をかけずに食べられるものが欲しい。

○モチ、又氷等の使用は、現存の我々には無理である

○計画的ビヴァークの場合はガソリンコンロを使用べきである。

5月連休合宿

1、合宿に入る前に、　　C.L. 佐々木史郎

この連休に、家事手伝を余ぎなくされる者、祖母の1周忌で都合の悪い者。金欠病で悩んでいる者、授業をサボりたくない者等、部内の複雑な事情をくまなく検討の上、1週間に予定された合宿を4日間に短縮した。そして1人でも多くの参加を望んだ。合宿期間は長いばかりが能ではない。部員に授業をサボルことを厳禁している我部では出来ることなら合宿期間は短かい程、理想的な訳である。ところで今回は、今まで定着が多すぎたという理由から縦走を計画していた。しかし、部員の要求を重じ、クーベルタン精神(参加することに意義がある!)を組み入れて再び定着合宿を迎える。

"春山での、あの連帯感を忘れずに楽しい合宿にしよう!"

"新人練成合宿のために、技術修得に全力を注ごう!"

2、計画概要

2.1、場所　　鹿島槍冷沢周辺、

2.2、期間　　1966年5月2日～5月5日

2.3、目的

2.3.1、雪上技術を系統立てて徹底させる。

2.3.2、登攀の実践。―全員の鹿島槍登頂を目指す―

2.3.3、meetingを重視する。

2.4、人員構成

C.L.、記録　佐々木史郎　3年

会計　河原　洋　2年

装備、気象、裏　良明　2年

食糧　杉本敏宏　2年

コーチ　岡村紀雄　4年

コーチ　森田栴吉郎　O.B

3. 行動予定

5/2 入山　午后 雪上訓練

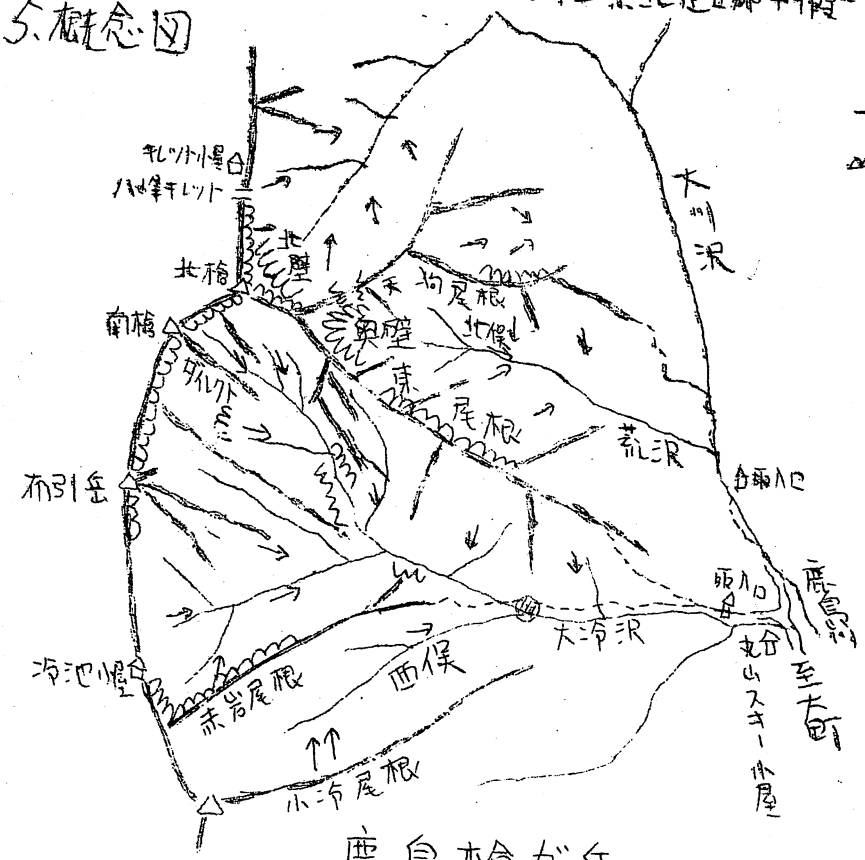
5/3 } ダイレクト……佐々木、河原、（杉本、森田）
5/4 } 鎌尾根……岡村、杉本（佐々木、真）
　　 栗尾根……森田、真（岡村、河原）
5/5 雪上訓練　午后　下山

（　）内は
多の予定も
あるが
下降、心異

4. 参加者名簿

岡村紀雄	23才	A.B型	長野市相木東348の2（日軍紀）
佐々木史郎	21才	B	南佐久郡八千穂村923（一）
真良明	20才	B	長野市大豆島松岡7552（順イ
河原洋	22才	A.B.	愛知県宝飯郡維阿津町汐郡（太良
杉本敏宏	19才	?	高田市栗本町5－148（寿コ
森田稲吉郎	26才		埼玉県北足立郡朝霞町膳久保

5. 概念図



鹿島槍ガ岳

S.U.A.C. News

○細木公平君健康状態の理由により退部
○市野勝正(キ3年) 信大ワンゲル7年 その他山行豊か、
入部する予定
○新人池内寛幸君(工化)入部 上田高校山岳部長でした。
○海外登山研究会復活 (会長佐藤代表が) 上田からは
岡村、佐々木の2名、テーマはネパール 資料おもちの方この
月報に連絡してください。我が方にはぜんぜん資料なし
○小宮氏よりピッケル寄贈、小宮氏へ
誠に有りがとうございました、半日がかりの整備の結果 新品
以上に生れ変りました。末長く部室として使用し、ポンコツのあか
つきには、私がもらいうけ我が家宝として床の間に飾り付けます。
○石川さんよりカシイレあり。本当に度々有りがとうございます。部
員一同感謝に耐えません。部発展のために使用致します。
○小宮、吉川両氏 無事卒業す
小宮氏住所 東京都練馬区中村2の12 TEL(991)の9462
吉川氏住所 篠ノ井市大字会区字荒屋52の6 郵政省 加高勤務
○本年度山岳部役員
主将 佐々木史郎 (農3)
会計 杉本敏宏 (化工2)
O.B係 岡村紀雄 (化工4)
新人係 裏 良明 (繊工2)
月報係 河原洋 (キ2)
〃 市野勝正 (キ3)

Leader会
佐々木、河原、裏
(注) 副将はおかない
装備、食糧係は
合宿ごとに任命する

○上小労山準備委員会主催 烏帽子親睦登山 4月24日
女性多数参加のうちに行われる。参加者41名
○上小労山結成大会 4月29日 町田氏をむかえて行われる
やはり女性多し、森氏副会長となる。

school news

紡織工学科ー繊維工学科となる。

編集代表　河原　洋
発行者　佐々木史郎
発行所　修己寮38号室
信州大学上田小岳部